

平成30年度 第3回豊橋市総合教育会議議事録要録

平成30年12月13日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

第3回 総合教育会議	
日時	平成30年12月13日(木) 午後2時30分～4時05分
場所	市役所東館4階 政策会議室
構成員	佐原 光一 市長, 山西 正泰 教育長 渡辺 嘉郎 教育委員, 高橋 豊彦 教育委員 内浦 有美 教育委員, 中島美奈子 教育委員
事務局	古池 弘人 教育部長 駒木 正清 教育監 角野 洋子 教育政策課長 木下 智弘 学校教育課長 黒釜 直樹 財務部長 朽名 栄治 財務課長  ほか 5名 全17名
その他	傍聴人 0名

議 事 日 程

協議事項

学力向上に向けた取り組みの成果と今後について

その他

総合教育会議の協議事項について

連絡事項 …次回開催日程 ・平成31年2月28日(木) 13:30～

(市長)

それでは、今年度3回目の総合教育会議を始めたいと思います。お手元の次第に従って進めてまいりたいと思います。

協議事項につきましては、「学力向上に向けた取り組みの成果と今後について」になります。では、中身について説明をお願いします。

## 協議事項

学力向上に向けた取り組みの成果と今後について

### ■学校教育課長 協議事項について資料説明

(市長)

まず、学力テストについて、もう少し詳しく聞きたいことがありましたらお願いします。

(高橋委員)

豊橋市の学力テストの結果ですが、正規分布をしているのでしょうか。それとも、M字になっているのでしょうか。

(学校教育課長)

結果は、そう(M字)なっています。

(高橋委員)

ここ10年ぐらい正規分布ではなくなっているようですね。

(市長)

それは、何か理由があるのでしょうか。

(教育長)

はっきりはわかりませんが、経済格差が関わっていることは間違いないと思います。

(高橋委員)

学力テストのことですと、テストの素点にこだわるべきかという話と、こだわるなら、どこにアプローチしてどう動かすかというところになると思います。

あとは、同時に行われている日々の生活を問う質問肢では、「教員に対して尊敬できますか」というところで「あまり尊敬できない」という回答が顕著に出たようですので、むしろそこからなのかということをお話させていただいたと思います。

それから、次ページの教科担任制の実施学校のアンケート調査で、「成果が出たか」に対して、教員は「あてはまらない」がゼロですね。この結果から、教員が一番喜んでいたりするようにも見取れます。教員が授業の準備を含めてゆとりをもって子どもに接する時間

をもてるという話と表裏一体なのかと思います。その一方で、児童が「とてもあてはまる」が教員よりも多いので、児童は何をどう喜んでいるのかということも知りたいです。

(学校教育課長)

先ほどの説明の補足になりますが、教科担任制のねらいの2つ目に「専門性の高い教員とTT(ティームティーチング)による授業を組むことで、優れた授業を肌で感じ、教員の授業力向上が望める」とあります。これは、例えば理科の実験であれば、理科の先輩教員の授業を見て、若い教員が授業のやり方や子どもが夢中になるテクニックを学ぶチャンスになっているということです。そういうところが大きいです。

(高橋委員)

これは、学校という職場は、OJTのようなことを行う機会が極めて少ないということの表れでしょうか。

(教育長)

そうですね。小学校ですと、どうしても「学級王国」を作ってしまいますからね。

(高橋委員)

つまり、他の教員が介入しにくいから、自由にできるという面もありますけど、悩んでしまうと、どうしようもなくなるという職場特性もあるのでしょね。

(教育長)

ただ最近では、だいぶオープンになりました。初任者には、拠点校指導教員がずっと関わって授業のやり方を教えていますし、人に見られることは多くなっています。

(市長)

話が少しずつ教科担任制に入っていますが、自分が子どものころ、音楽の専門でない担任が音楽の授業をやるのはそれはそれで楽しかったですが。

(教育長)

やる方はつらいです。ピアノを弾くことができない担任は、教材用のCDをかけるしかないです。

(高橋委員)

今、教育長が言われたように、子どもの成長には、先生が安定した状態で子どもを迎える方がより効率がよいと思います。私は、先ほどのアンケートの中で、教員の回答に着目したのは、そのアプローチで考えてみたらどうかと考えたからです。

(市長)

子どもの方では、担任以外の先生が授業をすることを受け入れているのですね。

(高橋委員)

だれが教えるというより、学習内容がシンプルに楽しかったか、わかったかということが大事だと感じていると見て取れます。

(渡辺委員)

それはそれでいいと思います。

この前紹介した麴町中学校の本を読んで驚いたのですが、法的には、学級担任制にしなければならないということはないので、その中学校では学年の教員全員が担任です。先ほど教育長が言われたような「学級王国」を作ることもなく、担任のあたりはずれもない。小学校でできるかどうかはわかりませんが、学級担任制というものを一度考えてみたらどうかと思います。今の学級担任制では、担任の先生に責任が行き過ぎてしまって、問題が起こった時に一人で抱えてしまい、その先生が大変になってしまうという弊害があると思いますね。

(市長)

豊橋では、小学校も中学校も学級担任制ですか。

(教育長)

中学は、基本は学級担任ですが、教科で担任は変わるので、朝と帰りには学級担任が教室へ行く形ですね。

(渡辺委員)

必ずしもクラス担任を置かなければならないという法律はないようですね。それは、慣例でそうなっているだけです。

(高橋委員)

学級担任がないというのは、是も非も含めて、担任が抱え込まないということですね。

(渡辺委員)

その中学校で一番良かったのは、先生方のコミュニケーションが活発になったということだそうです。一人で抱え込まないでみんなで相談していくことができるようになった。毎週ミーティングをして、学年の先生方全体で見えていくようになったということがよかったようです。

(高橋委員)

今の話で言いますと、先生が固定しないということは、このことは〇〇先生へ、このことは△△先生へというように子どもの流動性が高いので、教員同士がとても密接に情報を共

有することができるということですね。

教科担任制のメリットは、授業の準備にかかる時間が軽減されることではないでしょうか。授業の準備はとても大変だと思うのですが、教科担任制ですと、1つの準備で2～3クラスの授業ができるという意味で教員の負担は減るという効果はあるかもしれませんね。

(渡辺委員)

今は、小学校の先生は、準備の時間が1時間もないわけでしょう。それは、大変すぎると思います。

(中島委員)

少し別の視点ですが、保育園でもかつては担任が抱え込んでしまうことがあったのですが、延長保育や休日保育がある中で、職員の休みを確保していくために複数の担任制が増えてきています。それによって、職員のコミュニケーションによる資質の向上を目指すべきであり、実際に凶られるようになりました。保護者の方もいろいろな先生に見てもらえることで、「あの先生はこう言ってくれた、この先生はこう言ってくれた」という声が聞かれ、園全体の信頼が高まったということはあるかもしれません。

(高橋委員)

ここまでで、いくつかキーワードが出てきたと思います。「教科担任」「準備」「情報の共有」。特に「教科担任」を今後広げたいとなりますと、そのための予算措置が必要になると思います。今一番象徴的に出ているのは、教科担任制に対して教員が一番評価が高いというのは、このことによってようやく少し楽になったということが出ているのかと思います。

(市長)

小学校のうちは、一人の先生がついていてくれるから安心するのかと思っていたら、意外と子どもたちはそう思っていないくて、いろいろな先生と接しながらいろんなことを知りたいと思っていて、他の先生にあまり抵抗感はないのだということですね。

(教育長)

やはり授業が楽しいというのが最優先だと思います。理科ですと、理科の専門の先生は実験をきちんとやってくれるじゃないですか、専門ではない我々がやると違う結果が出てしまうことがありますよね。ですから、専門の教科を教えていくというのは、小学校でも必要だと思います。

(高橋委員)

学びにおいて、専門の先生が教えるのは、「楽しい」というキーワードと重なりますよね。

(渡辺委員)

「教育」と「学び」は違うところがあって、「教育」は、「教えられる」という受動的な部

分が強く、「学び」というのは、「主体的に学ぶ」という自発的なものですよね。教育だけしていたのでは、学力は伸びない。先生は、自分たちがちゃんと教えれば、学ぶだろうと思っているかもしれませんが、違います。先生が教えてしまっただけでは、子どもたちは学ばない。学ぶことを導くということが大事なのです。

(教育長)

それが、今回文科省がシフトしたところだと思います。今まで学習指導要領が変わるときには、学習内容だけを変えてきたのですが、今回初めて学習方法にシフトしました。「どう学ばせるか」というところまできたので、これまで三河で行ってきた方向によりやく国がついてきたという感じですね。学力テストでも、知識の量ではなく、それをどう生かすかということだと思います。

(渡辺委員)

そうですね。学力テストの結果と学力は全然違うのではないかと思います。

(市長)

傾向は出ると思います。今の学力テストは、ただ知識を詰め込んだだけでは解けないものもありますから。

(渡辺委員)

多少の相関はあると思いますが、そんなに強い相関ではないと思います。

(市長)

もう一つ、「もっととんがった子たちを育ててほしい」ということを産業界の方々から言われています。学校でわかりきったことを教えられて退屈している子に対して、これぐらいではまだまだだと思わせるような授業ができるコースをつくるものよいかと思いますね。

(高橋委員)

私の子どもは、かつて学校の先生から「習ってない漢字は使ってはいけない」と言われたそうです。そういった制限されていることを解放させるだけで随分違うと思います。

(教育長)

先生の中でも、子どもがやろうとすると、「それは来年やるからやらなくていいよ」と言ってしまう担任もいるんです。

(高橋委員)

習っていないことでもやっていいんじゃないかということが教員の中で浸透していないことが、とがった人を育てるということに対してブレーキになっているのではないかと思います。習ってないことをやってはいけないという空気感を変えるところからだろうと思

います。

(中島委員)

歴史上でも、とがった人が世の中を変えてきたと思いますので、いい意味でのとがった子が出てくるためにも教科担任制、飛び級などは必要かもしれません。また、スペクトラム的なことで特別支援学級に行く子がいると思いますが、すごく能力のある子が多いので、その子たちに合った教育方法があると、伸びるのではないかと思います。

(渡辺委員)

今は、教室で一斉授業をしています。これは明治時代になってからずっとやっている。150年以上やられているのは、どうかと思います。個々の子どもの興味に合った教育をしていくことは、今後望ましい教育方法だと考えます。

(市長)

何も興味をもたない子もいるのではないのでしょうか。

(中島委員)

評価を落とされて、自己肯定感が低くなりマイナスからのスタートになっている子は厳しいでしょう。

(高橋委員)

音楽や図工の話ですが、あの先生とうちの子はセンスが合わないから低い評価にされるという人がいますね。正しさを決めつけられることで自己肯定感が低くなることはありません。

(中島委員)

絵がすごく上手なのに、絵を描くことが嫌いという人がいて、その人は「よい評価をしてもらうために、先生が好きな絵を描いてきたから」と言っていました。この絵を描けば、いい評価がもらえるということで絵を描いてきたから絵が好きではなくなったそうです。

(市長)

私の同級生では逆のパターンの子がいて、小学校4年生まではすごく足が遅かったのですが、高学年になって急に足が速くなったら、その子は最終的にサッカーの選手になったんですね。それは、まさに自己肯定感で、みんなから「できるじゃないか」と言われて自分ができると思えるようになったら変わって、それから努力をするようになったそうです。きっかけを与えられる先生は大事ですね。

(中島委員)

それは、すごく運のいいケースで、評価を気にする子ほど優秀な子が多いそうです。評価



に負けてしまうのは、残念なケースですね。

今、教員向けの授業づくりの参考書である「どくだみ本」「なでしこ本」「つくし本」を読ませていただいたのですが、最初に書かれた「どくだみ本」は、様式、授業の形態などについて書かれていますが、「つくし本」の方では、授業の中でどんな発言をさせたらよいかというところが注目されていて、形ではなく中身のところが変わってきているところは期待できると思いました。

(高橋委員)

だからと言ってすぐ変わるのは難しいので、なるべく先生方にとって新しい価値観が流通するような雰囲気を作ることが必要だと思います。それを続けていくためには、教科担任制が有効ですし、その先には、渡辺委員が言われた「そもそも学級とは何だろう」というところを考えていく。そうした道筋を少しイメージできました。

(中島委員)

環境的なものを変えることで、先生は楽になったり、楽しくなったり、向上できたりできるのではないかと思います。

(渡辺委員)

今の教育システムで150年以上ずっと来てしまったから、それが教育であって、そうでないといけないと思ってしまうところがあるかもしれない。そこを少しずつ変えていかないと、世の中の流れについていけなくなるのではないかと思います。そうしないと、学校と社会が全然違うということになりかねない。本来、社会に出て生きる力を身につけるために学校に行っているわけですが、学校のために学校に行っていて、社会に出ると何も役に立たないという教育をしてしまっているわけですよ。150年前は、学校の先生たちはたぶん一番勉強していて、最先端の人たちだったわけですよ。しかし、世の中が変わってきて、学校の先生の知識は、それだけでは世の中に役立つ知識は少なくなっている。世の中が圧倒的に進んできてしまっている。学校の先生が教えても世の中の役に立たないわけですよ。子どもたちは、学校から世の中に出たら、学校で学んだ知識を生かしていかなければ、学校ではないですよ。今の教育に非常に危機感をもっています。

(教育長)

ですから、今回文科省が学習内容を変えるだけではだめだということに入り込んだわけです。今まで学習内容は決まっているので、どこの学校でも同じ内容を教えなければいけないということで教科書ができているじゃないですか。

(渡辺委員)

教科書を教えているのでは時代遅れで、教科書を一つの踏み台にして生きる力をつけていかなければいけないです。

(高橋委員)

社会に出ると競争なので、いかに違うことをやれるかというところを求めるわけですね。みんなと同じことだとアイデアとして採用されないので、評価基準が180度違うという視点をもつと違ってくると思います。

(市長)

中学生や若い人たちをいろいろな場面で見ていると、人の説明に対して、「それは違うのではないですか」と言ったら、人間関係を壊してしまうのではないかという無駄な配慮をしまっていることが多いです。ちゃんと指摘できないと、間違っただま進んでしまうので問題だと思いますね。

(中島委員)

私たちが子どものころはなかった職場体験のことですが、職場先で学んでくることはそれぞれ違います。でも、帰ってきたときに求められる評価は、「社会性が伸びたか」「挨拶ができたか」であって、その場その場で学んだこともあったと思うのですが、その評価はあまりない。その職場で学んだことをどう生かしていくかというところにちょっと興味があります。そういうところこそ、自分が変わるターニングポイントになっていくかと思います。

(市長)

市役所では、市民と直接向き合っていくので、相手のところまで自分の立場を変えて考えるということが必要なのですが、今、学校では十分に学びきれていないということを感じます。考える力、感受性、頭の中で組み立てる能力をもっと踏み込んでやったら、強い子たちが豊橋から育っていくと思います。

(渡辺委員)

すごくいいのですが、学校の先生たちは評価をしていかなければいけない。それが高校入試などに反映してしまうというところが大きな問題で、そうすると、子どもたちはそれに従わないといけなくなる。それがよくないと思います。

(教育長)

大学入試改革も進んできているので、知識の量だけのテストではなくなってきている。高校入試も変わってくると思います。

(高橋委員)

教育長が言われたように学校はいろいろ変わってきていると思います。しかし、保護者が内申に影響するからと思い込んでいて、そういう話題は保護者の中で普通にされています。そこに少し切り込むことも学校ですべきことと同時に必要かと思います。

(渡辺委員)

中学校の内申を高等学校の選抜入試の一つの手立てにすることは問題だと思います。

(市長)

しかし、そうなると、中学校での教育の重みが少なくなってしまう、学習塾を頼りにする傾向が強くなってしまわないでしょうか。

(渡辺委員)

今後は、ネットでいくらでも講義を受けられる時代になっていくので、学習塾もどうなっていくかわからないですよ。

(高橋委員)

タブレット一つあれば、どれだけのスキルでも身につけられるようになりますね。

(市長)

しかし、そうやって学んだ知識とまた違うところが必要なんですね。やはり、人と人との切磋琢磨して、議論してというところがないといけないんです。

(渡辺委員)

本来学校で教えるものは何なのかという議論が必要なのではないのでしょうか。

(市長)

子どもたちがたくさんのいい先生と出会って、成功体験や失敗体験をして少しずつ完成度を高め、自分で力をつけていくという仕組みが学校の中に必要ですね。

(教育長)

学力向上については、教科担任制だけではなく、他の施策も進めていかなければいけないと思っています。

(市長)

そのために必要な行政側のサポートは何かですね。市のサポートによって、子どもたちが自分で学び、自分で考え、子どもたちが自分で道を選ぶというのできるようになれば、私たちは子どもたちのためにがんばれたという満足感が得られるようになる。それができないと、すごく迷惑をかけてしまったという意識が残ってしまい、大人として申し訳ないことをしたという思いになってしまうので、それが気になっています。教育委員会としての新たな提案をお願いします。

たくさんの意見をありがとうございました。すぐ答えが出せるものではありませんが、皆さんのご意見の中から共通する考えの軸のようなものが出てきましたし、チャレンジする甲斐のある仕掛け方・動かし方も見つかったと思いますので、我々は行政として先生方と関

わりながら勉強していきたいと思います。学校側でも、先生たちがやってみたいな、こんなことが好きな先生方の仲間がここにいる、というようなところから始まっていい。また、一緒に考え、一緒に汗をかいてくれる人を見つけないと動かないから、その切り口の中で自分が楽しそうだ、生徒も前を向いて進める力になると思えること、そんなところが入り口ではないでしょうか。

## その他

### 総合教育会議の協議事項について

■教育政策課長 資料説明

## 連絡事項

・次回開催日程

平成31年2月28日（木）13：30～